第３章

調査結果活用協力校の取組

・岩美町立岩美北小学校
・米子市立加茂小学校

　岩美町立岩美北小学校と米子市立加茂小学校が取り組んだ調査結果の分析と活用方法を掲載しています。
　授業の中で、学力や非認知能力・学習方略をどのように育てていくか考察しました。

とっとり学力・学習状況調査の調査結果の分析と児童の見取り
～岩美町立岩美北小学校～

本校は、とっとり学力・学習状況調査を２年間実施し、今年度から児童の「伸び」や「変化」等が把握できるようになった。今年度から、とっとり学力・学習状況調査結果活用協力校としてその活用について研究していくため、まず全教職員で、どのような調査結果があるか、その結果から何が見えてくるのか等について、研修を行い、共通理解を図った。

また、個々の児童や学級、学校の分析について、帳票５や帳票４０とあわせて、本校で実施している「ｉチェック（東京書籍）」を活用し、以下に紹介するシート等を独自に作成し、教師の主観と客観的データを関連付けることで多面的に児童や学校の状況を見取る試みを行った。このように、今年度は、調査結果を分析し、個々の児童の状況を見取ることに重点を置いた。

さらに、今年度から２年間、研修生として兵庫教育大学に派遣されている本校の河上教諭が、研究テーマを「とっとり学力・学習状況調査を活用した学校マネジメント」として取り組んでいることから、学校や県教育委員会だけでなく、大学等の外部から知見を生かしながら研究を進めている。本報告書には、校内研修で活用した、河上教諭の作成した分析資料等を掲載する。

１　分析の実際

（１）全体と個人の傾向をつかむ

全体の傾向を把握するため、帳票４０を活用して、それぞれの数値について県平均との差に着目して色分けをした。**【サンプルデータ①】**

個人の傾向を把握するため、帳票４０の右側にとっとり学力・学習状況調査の結果から分かる①から⑤の児童の様子を記入する欄、本校が実施している「ｉチェック（東京書籍）」の散布図Ⅰ、Ⅱのそれぞれの区分（結果返却時にすでに処理されている区分）を記入する欄、担任が確認したことをチェックする欄を追加した。担任がチェックする欄には、データから分かる児童の状況と普段の児童の様子との関係性に気になることがあれば、印をすることにした。こうすることで、個人の状況を１枚のシートで見取ることができるようにした。

このように、学校が実施しているｉチェック等の様々な調査の結果と、担任の見取りを関連させることで、多面的に児童をとらえることができると考えている。

【サンプルデータ①】

県平均以上　　県平均より著しく低い

①学力レベル高、学習方略・非認知能力低
②学力レベル低、学習方略・非認知能力高
③学力レベル低、学習方略・非認知能力低
④学習方略・非認知能力に５が多い
⑤上記①～④には該当しないが、気になる

			国語		算数・数学		R3→R4（変化量）								R4結果										
			R4レベル	昨年度からの学力の伸び	R4レベル	昨年度からの学力の伸び	主体的・対話的で深い学びの変換	学習方略						非認知能力	主体的・対話的で深い学びの変換	学習方略					非認知能力				
								柔軟的方略	プレゼンテーション	作業方略	人間関係・コミュニケ	認知的方略	余力実験方略	自己肯定感（参考値）		柔軟的方略	プレゼンテーション	作業方略	－	認知的方略	余力実験方略	自己肯定感（参考値）	向上	担任
		学校平均																							
学年	組	出席番号	鳥取県平均	6-A	0	6-C	2	0.0	-0.1	0.0	-0.1	－	0.0	0.0	0.3	4.0	3.4	3.5	3.4	－	3.7	3.9	3.3	3.	
		1																							
		2																							
		3																							
		4																							
		5																							
		6																							
		7																							
		8																							
		9																							
		10																							

とっとり学習	iチェック 散布図Ⅰ【個人の心の安全】	iチェック 散布図Ⅱ【クラスの成長力】	担任
	A	A	
③	E	C	
	B	A	
⑤	D	B	
	C	B	
②	B	C	
④	A	A	
	A	D	
	B	A	
②	A	B	

ｉチェック散布図Ⅰ【個人の心の安全】の区分

Ａ：自己肯定感が高く、人間関係も良好（青）
Ｂ：自己肯定感・学級適応感が全国平均よりは下がるものの、どちらも否定的な回答より、肯定的な回答が多い（色なし）
Ｃ：自己肯定感は高いが、人間関係に悩みがある（オレンジ）
Ｄ：人間関係は良いが、自己肯定感が低い（オレンジ）
Ｅ：どちらも低い（赤）

ｉチェック散布図Ⅱ【クラスの成長力】の区分

（縦軸：規律と思いやり、横軸：発信力）
Ａ：両方高い（青）
Ｂ：規律と思いやりは高いが、発信力は低い（オレンジ）
Ｃ：規律と思いやりは低いが、発信力は高い（オレンジ）
Ｄ：両方低い（赤）

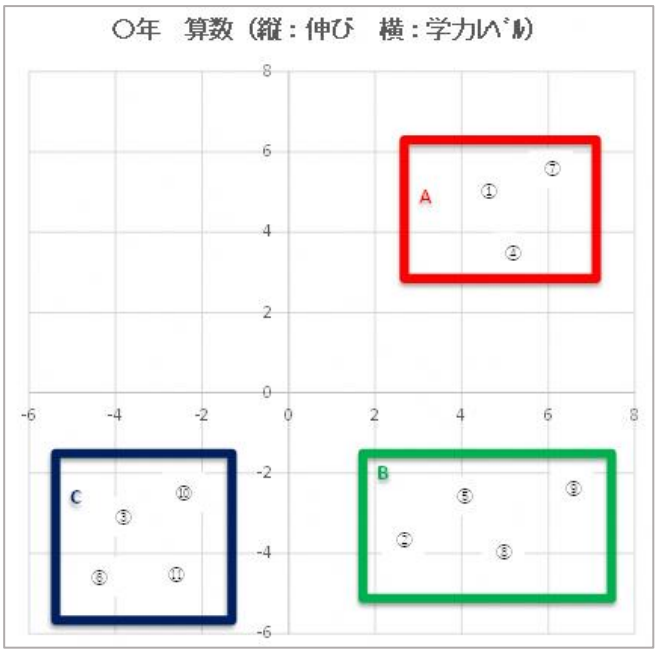
（２）「学力レベル」と「学力の伸び」の状況によるグループごとの傾向をつかむ

帳票４０に表示されている「昨年度の学力レベル」と「今年度の学力の伸び」をクロス集計することで、学力を伸ばしている児童が、昨年度どの学力レベルであったかが一目で分かる。

例えば、昨年の学力レベルが高くても、学力が伸びていない児童（**【サンプルデータ②】**Ｂグループ）や、昨年の学力レベルが高くなくても、伸びている児童等について把握することができる。これらの分析は、個に応じた指導や支援に生かすことができると考える。

また、帳票４０をそれぞれのグループに並べ替えたシート**【サンプルデータ③】**を作成した。どのグループが、どのような傾向にあるのか（あるいは特徴等はないのか）が把握しやすくなる。グループごとに傾向を分析し、伸ばしたいターゲットグループを決め、課題と思われる学習方略や非認知能力等の項目を伸ばすための指導・支援等を行うことができる。

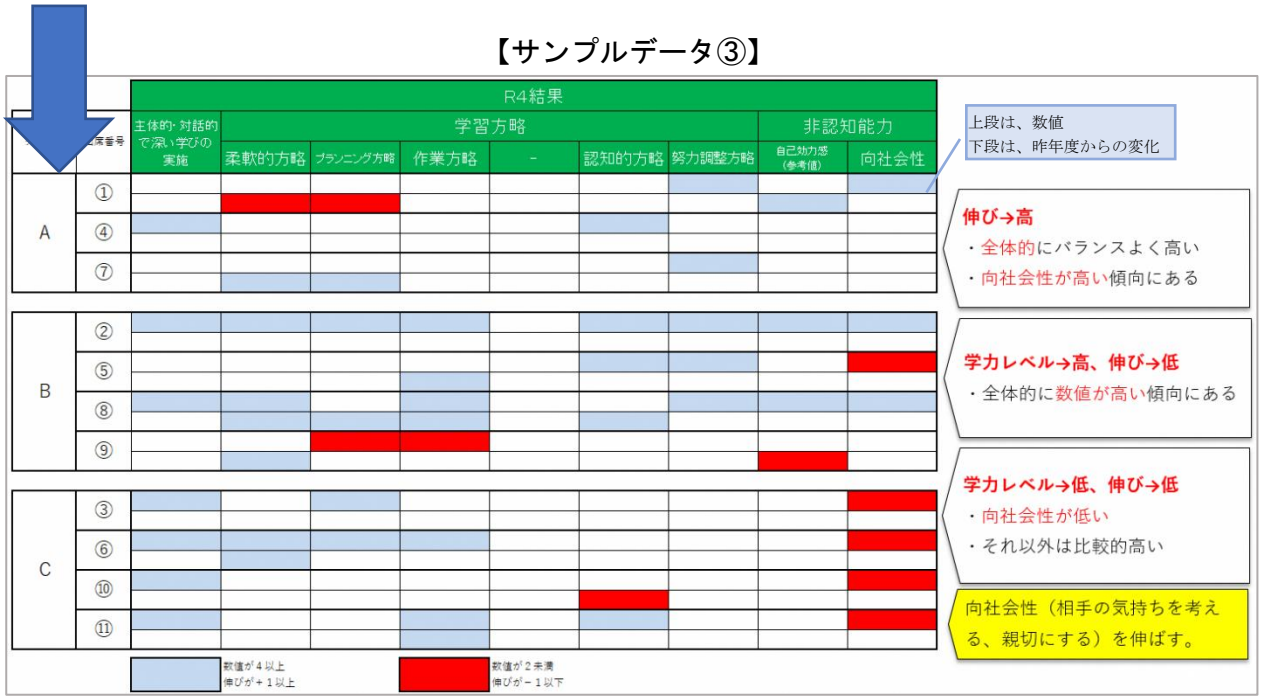
【サンプルデータ②】



例えば、ここでは、Ｃグループ（学力レベルが高くなく、伸びていないグループ）をターゲットグループと設定し、その傾向を確認したところ、「向社会性が低い」ことが分かった。そこで、この集団を伸ばすための「向社会性」を意識した声掛けや指導・支援について考え、担任をはじめ学校全体で取り組みを進めること考えられる。

また、教員同士で伸びている児童に対して行った指導を振り返り、共通する部分を見いだすことで、学級経営のヒントをつかんだり、個への最適な指導方法を模索したりすることができると考える。

【サンプルデータ③】



２　令和５年度に向けた校内研修のまとめ

とっとり学力・学習状況調査の結果等から見えてくる児童の様子をもとに、先生方の思いや考えを出し合い、令和５年度の研究テーマを作る校内研修を実施した。

以下のスライドは、令和５年２月１０日、とっとり学力・学習状況調査の基となる埼玉県学力・学習状況調査の作成に関わられた文部科学省地方教育アドバイザー大江企画官と大井係長が本校に訪問された際に、本校の取組として紹介した資料を一部抜粋したものである。

ただし、来年度の具体的な取組については、構想の段階である。

【校内研修のまとめ】

とっとり学力学習状況調査結果より本校の弱み

帳票05より
△話を聞き、発表する力

自分はそれが実行できるという期待や自信

帳票40より
6年：柔軟的方略・自己効力感
（学習の仕方を自分の状況に合わせて柔軟に変更していく活動）
5年：努力調整方略・自己効力感
（苦手などの感情をコントロールして学習への動機を高める活動）
4年：作業方略・自己効力感
（ノートに書く、声に出すといった作業を中心に学習を進める活動）

職員研修～Part 1～

ゴール
「こんな北っ子に育ってほしい」

「北っ子のよさ」
○算数での学び合いの仕方が身についてきた。（ルールとしてみんなが関わる）
○素直で明るく一生懸命
○明るくて社交性が高い。

「改善点」
○考える力・自信のなさ
・いろいろな立場に立って考える
・学習（思考力判断力）
・筋道を立てて説明する。
○立ち止まって考える力が弱い。
○折り合いをつける力が弱い。

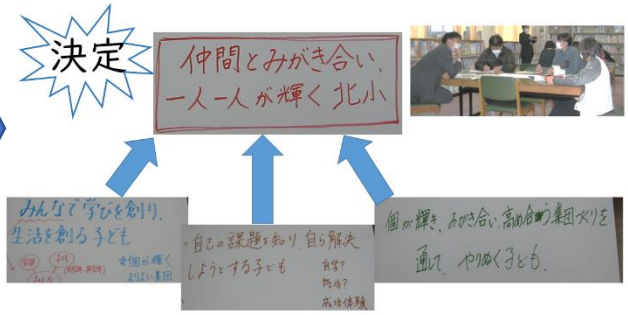
【こんな北っ子に育ってほしい】

＊自分の思いを伝えあう中で、お互いの意見をすり合わせ、よりよい集団生活を創り上げる子ども
＊個が輝く～独りでも立ち止まって考え行動できる・ルールを守れる・自分の軸をぶらさない～子ども
＊いろいろな立場に立って、考えられる子ども

まさに、とっとり学力学習状況調査結果の帳票05と40より
みえてきたこと＝教室現場で担任が感じていること

職員研修～Part 2～

決定



職員研修～Part 3～

「仲間とみがき合い
一人一人が輝く北小」
にするために・・・

教科領域	学級活動（児童自治力の育成） →詳しくは年度末に研究推進を開催予定
学習面	聞く・伝える力を育てる →聞き合い、伝え合う子どもの育成って感じ？
生活面	トイレのスリッパそろえ →北小自慢となるよう児童自治力にも反映させる

これらの結果をうけて

学級経営を基盤として
○学級活動を核としての主体的対話的で深い学びを積み重ねる
○教科・領域における北小スタンダードの継続

＊他者との協働がうまれ　＊社会情緒的スキルの向上

感情コントロール

きまりを守り たのしく つよく 生きる 子どもの育成

仮説ですが・・・

＊学級経営を基盤として、安心安全な学級と温かい雰囲気をつくっていく過程において
①学級活動では児童の自治的活動を取り入れたり、教科領域では北小スタンダードを核にして協働的な学びを展開したりすることを通して、児童は他の話を聞き入れ（受け止め）自分の言葉で話すようになるだろう。

②他の話を聞き入れ（受け止め）自分の言葉で話すことができれば、他との信頼関係が育まれ、社会情緒的スキルも向上したり、感情コントロールもできるようになるだろう。

③あれもこれもではなく、トイレスリッパそろえという１点集中のことができれば、他の凡事もできることが多くなるだろう。

では、どんな北っ子に？

＊学級経営を基盤として

①他の話を聞いて（受け止め）、自分の言葉で話せる子

②トイレスリッパそろえのできる子

検証として

①毎月末に行うアンケート統計
（とっとり学力・学習状況調査アンケート参照）

②いじめ・問題行動発見数

毎月末のアンケート例

「よくできる」・・・3てん　「だいたいできる」・・・2てん
「あまりできない」・・・1てん　「できない」・・・0てん

時刻を守る	学習や活動の始まる時刻を守ることができていますか。
整理整頓	ぬいだはき物のかかとをそろえることができていますか。
返事	名前をよばれたら「はい」とはっきりと返事をすることができていますか。
言葉づかい	相手の気持ちを考え、やさしい言葉づかいができていますか。
学習のきまり	先生の話や友達の発表をしっかり聞き、自分の考えを伝えることができていますか。
生活のきまり	人の集まるところでは静かにし、しせいを正すことができていますか。

３　成果と今後の取組について

分析資料の他にも、各学年の学習方略・非認知能力等を１枚にまとめた資料も作成した。まとめてみることで、学校全体としての傾向を見ることができ、研究の方向性の確認や、研究の成果を測る指標とすることができるのではないかと考えている。とっとり学力・学習状況調査の結果は、膨大な量であるが、学校として何が見たいのか、何をポイントにするのかを焦点化することで様々な分析をすることができる。

調査結果や毎月のアンケート等を活用して、日々の授業改善、学級経営等に生かしていけるよう取り組んでいきたい。

とっとり学力・学習状況調査の調査結果の分析と活用
～米子市立加茂小学校～

昨年度に引き続き、とっとり学力・学習状況調査結果活用協力校とし、その分析と活用について取組を行った。

実施３年目ということで、過去２年間の取組を踏まえて児童の「伸び」を把握し、主に帳票２８、４０、４２の３つの帳票を活用して学力の伸びと非認知能力や学習方略の変化について分析を行った。分析・活用にあたっては、主に「旧学年」と「現学年」で学年団としての分析を行い、個別の児童への手立てを考えたり、学級経営に着目して効果のある取組を共有したりして、とっとり学力・学習状況調査の分析結果を活用し、一人一人の学力向上へとつながる取組を行っている。

１　取組の概要

８／１９　分析説明会（オンライン）
８／３１　校内研修会
◆調査の目的、本校児童の概要説明、「帳票４０」を用いた学級別傾向分析
９／２２　県教育委員会説明会
１０／１７　旧学年分析（旧４年団、旧５年団）＊１０／２５までの任意の日
１０／２６　現学年分析（現４年団、現５年団、現６年団）＊１１／８までの任意の日
１１月～　改善に向けた取組の実施
１１／１１　とっとり学力・学習状況調査の分析シートのシステム操作説明会（オンライン）
１／２６　加茂中学校区小中教育振興会運営委員会　学習指導委員会
◆とっとり学力・学習状況調査による学力分析・実態把握及び情報交換
１／２７　とっとり学力・学習状況調査の分析シートの活用方法説明会（オンライン）
２月上旬　校内研修会
◆改善策について分析・報告

２　分析・活用の取組

昨年度は、とっとり学力・学習状況調査の結果分析を４年生以上の担任だけで行っていたが、今年度は、担当の学年だけでなく、１年生から３年生までの担任や級外の先生をそれぞれ学級に振り分け、全職員で行った。

（１）旧学年分析≪「帳票４０」を活用≫

①昨年度の取組の確認

昨年度に各担任が設定した「改善に向けた取組」を確認した。県教育委員会が実施したとっとり学力・学習状況調査分析方法説明会の資料等を参考にして、特に昨年度伸びが大きかった学級に注目して、効果が高かったと思われる取組について分析を行った。その中で、特に伸びの大きかった昨年度の５年生では、「テスト週間」を設定し、計画的に学習することを意識付ける取組を実施したことで、自分で計画を立てて学習する力や自分の分からないことに合わせた学習方法を選択・実行する力がついてきたと考えられること、また、「語句・語法」のプリントを定期的に行ったり、文章量の少ない物語文や説明文のプリントに続けて取り組んだりしたことで、国語の学力の伸びが大きくなったと考えられることが確認された。

②「帳票４０」を基にした分析

◆個々の児童

〇昨年度からの学力の伸びを確認し、特に伸びの小さい児童を確認する。

・「学力の伸び」が１以下の児童を確認する。

〇非認知能力・学習方略が低い児童を確認する。

・「学力の伸び」と「非認知能力・学習方略」の変化量を合わせて個々の状況を見取る。

・数値が「２」以下の項目が多い児童を確認する。

◆旧学級の取組の「成果」の振り返り

〇昨年度立てた「改善策」と旧学級児童の「学力の伸び」「非認知能力・学習方略」の推移を比べる。

（２）現学年分析≪「帳票２８・４０」を活用≫

①昨年度の改善取組の確認

昨年度に各担任が設定した「改善に向けた取組」と昨年度担任が分析した「帳票４０」の結果を見て、改善の取組とその成果について確認した。

②「帳票２８」をもとに分析

※学力の伸びと学力の状況について、学年全体の概要をつかむ。

〇学力の伸び幅の特徴を確認する。

・伸び幅が県平均よりも大きい学年や教科を見つける。

〇学力レベルの特徴を確認する。

・学力が県平均を上回っている教科を見つける。

〇学力層別の伸びの状況を確認する。

・傾きが大きい学力層を見つける。

・県平均より傾きが大きい学年や教科を見つける。

③「帳票４０」をもとに分析

◆個々の児童

〇旧学年担任から引継ぎをうけている児童を重点的に確認する。

◆学級

〇主体的・対話的で深い学びの実施、非認知能力、学習方略の状況を確認する。

・平均値が県平均、全国平均を０．３以上上回っている項目を確認する。

・平均値が４．０以上の項目を確認する。

・担任が課題と感じる主体的・対話的で深い学びの実施、非認知能力、学習方略の項目について、学級の状況を考慮しながら確認する。

④改善策の設定

◆個々の児童

〇分析の結果、担任の見立てとギャップがあった児童１、２名への対応策を考える。

◆学級

〇「昨年度の改善策とその成果」「今年度の学級の状況」をもとに改善策を考える。

・国語、算数の学習で、特に重点的・継続的に取り組む方策を立てる。

・「非認知能力・学習方略」から伸ばしたい力を挙げ、そのための方策を立てる。

⑤ワークシートに改善策を記載する取組

現学年での分析結果を受けて、各担任が改善策をワークシートに記入し、手立ての明確化と可視化を図っている。ワークシートには、個別の児童の分析と改善策を記入する項目と、学級全体の分析と改善策を記入する項目を設定し、実施する内容をより具体的に分かりやすくなるような工夫をしている。

また、今年度より、このワークシートを中学校区の小学校で使用することにした。同じ視点で分析することで、今後の実態把握及び情報交換が進むと思われる。

【改善策を記載するワークシート】

令和4年度　とっとり学調分析をふまえた改善　　年　　組

1. 個別の児童（4年，5年，6年）

児童名		個人番号	

	学力レベルの伸び		R3からの伸び								
			AL	学習方略						非認知能力	
	国語の伸び	算数の伸び		柔軟的	プランニング	作業	人的リソース	認知的	努力調整		
							ー				

○担任の分析	○具体的な手だて

○結果と考察（２月）

2. 学級の取り組み

	学力レベル		AL	学習方略						非認知能力	
	国語	算数		柔軟的	プランニング	作業	人的リソース	認知的	努力調整		
本学級							ー				
米子市							ー				
県							ー				

○担任の分析	○改善プラン	伸ばしたい力

○結果と考察（２月）

個別の児童

学級の取り組み

（記載例）「個別の児童」

児童名		個人番号	

	学力レベルの伸び		R3からの伸び								
			AL	学習方略						非認知能力	
	国語の伸び	算数の伸び		柔軟的	プランニング	作業	人的リソース	認知的	努力調整	勤勉性	
	10	3	-0.2	1	0.3	-0.3	ー	1.3	0.3	0.4	

○担任の分析	○具体的な手だて
・国語も算数も、学力は伸びている。 ・学習方略についても、１つの項目以外、学級平均を上回っている。 ・何事にも一生懸命取り組むため、学習方法や学習内容のポイントをアドバイスすると、粘り強く取り組める。	・意欲的で、物事に粘り強く取り組むため、学習の取り組み方など、新しい方法や内容を助言し、支援していく。 ・算数にやや苦手意識がある。苦手を克服するために、家庭学習で何を学習したらいいのか一緒に考え、取り組めるようにする。

（記載例）「学級の取り組み」

	学力レベル		AL	学習方略						非認知能力	
	国語	算数		柔軟的	プランニング	作業	人的リソース	認知的	努力調整	自己効力感	やりぬく力
本学級	5-C	5-C	4.2	4.2	3.6	3.7	ー	4.0	4.1	3.7	3.1
米子市	5-A	5-C	4.0	4.0	3.6	3.6	ー	3.9	3.9	3.6	3.1
県	5-A	5-C	3.9	3.9	3.5	3.5	ー	3.7	3.9	3.4	3.1

○担任の分析	○改善プラン	伸ばしたい力	やりぬく力
・能力の高い児童は、学習方略の数値も高い傾向にある。 ・全体的に「やりぬく力」が低い傾向にある。 ・ALや学習方略は高い数値だが、学力レベルは低い。	・自己の成長や最後までやりきったという体験をして自分の力を伸ばそうという意欲を高められるよう、「がんばりカード」で毎日の自分の目標に対するふり返りを行い、日々成功体験をつみ重ねていく。 ・計画性、プランニング能力が高められるよう、テスト前に自分で計画をたてて、自学でテスト勉強に取り組むようにする。		

（３）活用の取組

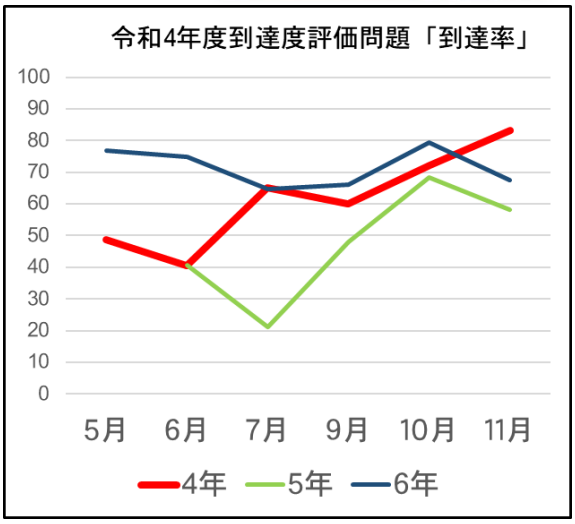
①算数の取組

４年生の「帳票２８」の分析により、算数は県平均レベル「－１」、全ての領域の正答率は県の平均より低い結果となった。学力レベルは、低～中レベルが多く、算数を苦手としている児童がいることが分かった。

この結果をうけて、既習事項を定着させるため、算数の学習の始めに、「読み上げ計算」を取り入れた。（計算は、学習で使う計算や関係のある計算を行う。）

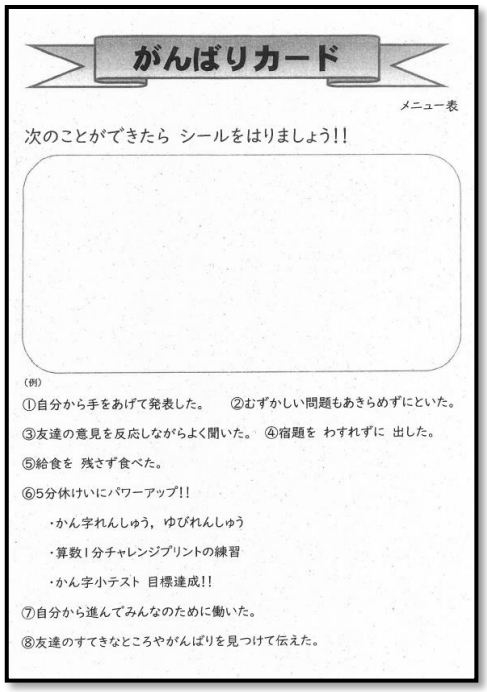
〈やり方〉
① たし算やわり算の筆算などの答えを読み上げる。（１分間）
（ペアで行い、相手は答えを確認する。）
② 答えることができた数を記録表に記録する。
③ ペアで交代して行う。

この取組の成果として、毎月実施している「小学校算数単元到達度評価問題」で、学力目標到達点に達している児童の割合が増えたことがあげられる。また、学習の始めに声を出して「読み上げ計算」をすることにより、算数に苦手意識をもっている児童が、学習中に積極的に発言する姿も多く見られた。回数を重ねるごとに、記録の伸びが分かることも、児童の意欲の喚起につながっていると思われる。



②非認知能力「やりぬく力」に着目した取組

４年生の非認知能力「やりぬく力」の結果が、県平均レベルと同等であった。「やりぬく力」が向上すれば、学習に対しても、粘り強く取り組めるのではないかと考えた。そこで、自分の力を伸ばそうという意欲を高められるよう、「がんばりカード」で毎日の自分の目標に対するふり返りを行い、日々成功体験をつみ重ねていくことを行った。


がんばりカード

メニュー表

次のことができたら シールをはりましょう!!

（例）
①自分から手をあげて発表した。　②むずかしい問題もあきらめずにといた。
③友達の意見を反応しながらよく聞いた。　④宿題を わすれずに 出した。
⑤給食を 残さず食べた。
⑥5分休けいにパワーアップ!!
・かん字れんしゅう，ゆびれんしゅう
・算数１分チャレンジプリントの練習
・かん字小テスト 目標達成!!
⑦自分から進んでみんなのために働いた。
⑧友達のすてきなところやがんばりを見つけて伝えた。

がんばりカード

LEVEL. 2　年　組　名前（　　）

３　考察

今年度は実施３年目で、一昨年度からの取組を踏まえて学力の伸びと非認知能力・学習方略の変化を見ることができた。校内研で分析のやり方などを研修し、１～３年担任、級外もそれぞれ４年生以上のクラスに振り分け、全職員で行うことによって、とっとり学力・学習状況調査の意義が浸透してきた。児童や学級の実態の特徴をとっとり学力・学習状況調査の結果の数値から読み取ることを通して、個の児童や学級の伸び、改善に向けた取組の視点が明確になり、それを学年団で共有し、学年全体で進めることができた。

同じ児童の経年の変化を見ることによって、どのような取組が有効なのかが分かり、個人の学力の伸びも見えてきた。特に、６年生は、学力レベルを上げた児童が増えている。一昨年度からの取組（基礎基本の定着を繰り返し行うこと・自分で見通しを持って計画的に学習を進めること）の成果だと思われる。今年度は、４年生からの児童の経年変化が見られるように、各学級において一人の児童に着目して進めている。

また、結果分析のワークシートを中学校区の小学校で統一した。その結果、同じ視点での分析や児童の実態把握を行うことができ、情報交換がしやすくなった。来年度からは、中学校区内の小学校でのよい取組なども共有したいと考えている。

今後は、とっとり学力・学習状況調査の結果分析のデータを校内研究の成果指標として活用していきたい。さまざまなデータの解釈の中から、仮説をたて、「何をしたら、何が変わるのか。」を追求し、校内研究を通して、教員の指導力向上や児童の学力向上に向けた取組を充実させていきたい。また、小中連携の一つとして、小学校６年生から中学校１年生での学力レベル等にも注目し、小学校においても中学校３年生までを見通した取組を行っていきたい。

友だちと相談しながら、算数のまとめを進める６年生